

怪夢

夢野久作

青空文庫

工場

おごそ
 廠かに明るくなつて行く鉄工場の霜朝である。

二三日前からコークスを焚き続けた大坩堝が、鑄物工場の薄暗がりの中で、夕日のように熟し切つている時刻である。

黄色い電燈の下で、汽罐の圧力計指針が、二百封度を突破すべく、無言の戦慄を續けている数分間である。

真黒く煤けた工場の全体に、地下千尺の静けさが感じられる一刹那である。

……そのシンカンとした一刹那が暗示する、測り知れない、ある不吉な予感……この工場が破裂してしまふような……。

私は悠々と腕を組み直した。そんな途方もない、想像の及ばない出来事に対する予感を、心の奥底で冷笑しつつ、高い天井のアカリ取り窓を仰いだ。そこから斜めに、青空はるかに黒煙を吐き出す煙突を見上げた。その斜に傾いた煙突の半面が、旭のオリーブ色をクツキリと輝かしながら、今にも頭の上に倒れかかつて来るような錯覚の眩暈を感じつつ、頭

を強く左右に振った。

私は、私の父親が頓死とんしをしたために、まだ学士になったばかりの無経験のまま、この工場を受け継がせられた……そうしてタツタ今、生れて初めての実地作業を指揮すべく、引っぱり出されたのである。若い、新米しんまいの主人に対する職工たちの侮辱と、冷罵れいばとを予期させられつつ……。

しかし私の負けじ魂は、そんな不吉な予感のすべてを、腹の底の底の方へ押し隠してしまった。誇りかな気軽い態度で、バットを横よこ蹴くえにしいしい、持場持場についている職工たちの白い呼吸を見まわした。

私の眼の前には巨大なフライトホイールが、黒い虹にじのようにピカピカと微笑している。その向うに消え残っている昨夜からの暗黒の中には、大小の歯車が幾個となく、無限の歯齧はがみをし合っている。

ピストンロッドは灰色の腕をニューと突き出したまま……。

水圧打釘機だびようきは天井裏の暗がりくらを睨にらみ上げたまま……。

スチームハムマーは片足を持ち上げたまま……。

……すべてが超自然の巨大な馬力と、物理原則が生む確信とを百パーセントに身構えて、私の命令いっか一下を待つべく、飽くまでも静まりかえっている。

……シイ——イイ……という音がどこからともなく聞こえるのは、セーフチーバルブの唇を洩もるスチームの音であろう……それとも私の耳の底の鳴る音が……。

私の背筋を或る力が伝わった。右手が自おのずから高く揚あがった。

職工長がうなずいて去った。

……極めて徐々に……徐々に……工場内に重なり合った一切の機械が眼醒めざめはじめる。

工場の隅から隅まで、スチームが行き渡り初めたのだ。

そうして次第次第に早く……遂ついには眼にも止まらぬ鉄の眩覚が私の周囲から一時に渦巻き起る。……人間……狂人……超人……野獣……猛獣……怪獣……巨獣……それらの一切

の力を物ともせぬ鉄の怒号……如何いかなる偉大なる精神をも一瞬うちの中に恐怖と死の錯覚の中に誘い込まねば措おかぬ真黒な、残忍冷酷な呻しんぎん吟が、到る処に転がりまわる。

今までに幾人となく引き裂かれ、切り千切ちぎられ、タタき付けられた女工や、幼年工の亡霊あざけを嘲る響き……。

このあいだ打ち砕かれた老職工の頭蓋骨を罵倒する声……。

ずっと前にヘシ折られた大男の両足を愚弄する音……。

すべての生命を冷眼視し、度外視して、鉄と火との激闘に熱中させる地獄の騒音……。

はるかの木工場から咽んで来る旋回円鋸機の悲鳴は、首筋から耳の付け根を伝わって、

頭髮の一本一本毎に沁み込んで震える。あの音も数本の指と、腕と、人の若者の前額を斬り割いた。その血しぶきは今でも梁木の胴腹に黒ずんで残っている。

私の父親は世間から狂人扱いにされていた。それは仕事にかかったが最後、昼夜ブツ通しに、血も涙もない鋼鉄色の瞳をガラガラさせる、無字な、醜怪な老職工だからであった。それがこの工場の十字架であり、誇りであると同時に、数十の鉄工所に対する不断の脅威となっていたからであった。

だから人体の一部分、もしくは生命そのものを奪った経験を持たぬ機械は、この工場に一つもなかった。真黒い壁や、天井の隅々までも血の絶叫と、冷笑が染み込んでいた。それ程左様にこの工場の職工連は熱心であった。それ程左様にこの工場の機械等は真剣であった。

しかも、それ等の一切を支配して、鉄も、血も、肉も、靈魂も、残らず蔑視して、木ツ葉の如く相闘わせ、相呪わせる……そうして更に新しく、偉大な鉄の冷笑を創造させる……それが私の父親の遺志であつた。……と同時に私が微笑すべき満足ではなかつたか……。「ナアニ。やつて見せる。兒戯に類する仕事だ……」

私は腕を組んだまま悠々と歩き出した。まだまだこれからドレ位の生靈を、鉄の餌食えじきに投げ出すか知れないと思いつつ……馬鹿馬鹿しいくらい莊嚴な全工場の、叫喚きょうかん、大喚を耳に慣れさせつつ……残虐を極めた空想を微笑させつつ運んで行く、私の得意の最高潮……。

「ウワツ。タタ大将オツ」

という悲鳴に近い絶叫が私の背後に起つた。

「……又誰かやられたか……」

と私は瞬間に神経を冴さえかえらせた。そうしておもむろに振り返つた私の鼻の先へ、クレエンに釣られた太陽色の大垣塙が、白い火花を一面に鏤ちりばめながらキラキラとゆらめき追つていた。触れるもののすべてを燃やすべく……。

私は眼が眩くらんだ。ポンプの鑄型を踏み碎いて飛び退のいた。全身の血を心臓に集中させたまま木工場の扉ドアに衝突して立ち止まった。

私の前に五六人の鑄物工が駆け寄って来た。ピョコピョコと頭を下げつつ不注意を詫びた。

その顔を見まわしながら私はポカンと口を開あいていた。……額と、頬と、鼻の頭に受けた軽い火傷やけどに、冷たい空気がヒリヒリと沁みるのを感じていた……そうして工場全体の物音が一つ一つに嘲笑しているのを聴いていた……。

「エへへへへへへへへ」

「オホホホホホホホ」

「イヒヒヒヒヒヒヒヒ」

「ハハハハハハハハハハ」

「フフフフフフフフフ」

「ゲラゲラゲラゲラゲラ」

「ガラガラガラガラガラ」

「ゴロゴロゴロゴロゴロ」

「……………ザマア見やがれ……………」

空中

T11と番号を打った単葉の偵察機が、緑の野山を蹴落しつつスバラシイ急角度で上昇し始めた。

「……………オイ……………。Y中尉。あの11の単葉なら止せよ。君は赴任匆々だから知るまいが、アイツは今までに二度も搭乗者が空中で行方不明になったんだ。おまけに二度とも機体だけが、不思議に無疵むきずのまま落ちていたという曰いわく付きのシロモノなんだ。発動機も機体もまだシツカリしているんだが、みんな乗るのを厭いやがるもんだから、天井裏にくっ付けておいたんだ……………止せ止せ……………」

そう云つて忠告した司令官の言葉も、心配そうに見送った同僚の顔も、みるみるうちに旧世紀の出来事のように層雲の下に消え失せて行つた。そうして間もなく私の頭の上には朝の清新な太陽に濡れ輝いている夏の天空が、青く青く涯はてしもなく拡がって行つた。

私は得意であった。

機体の全部に関する精確な検査能力と、天候に対する鋭敏な観察力と、あらゆる危険を突破した経験以外には、何者をも信用しない事にきめている私は、そうした司令官や同僚たちの、迷信じみた心配に対する単純な反感から、思い切ってこうした急角度の上げ舵を取ったのであった。……そんな事で戦争に行けるか……という気になって……。

だが……ソナのような反感も、ヒヤリと流れかかる層雲の一角を突破して行くうちに、あとかたもなく消え失せて行った。そうして、あとには二千五百米^{メートル}突を示す高度計と、不思議なほど静かなプロペラの唸りと、何ともいえず好調子なスパークの靈感だけが残っていた。

……この11機はトテモ素敵だぞ……。

……もう三百キロを突破しているのにこの静かさはドウダ……。

……おまけにコンナ日にはエア・ポケットもない筈だからナ……。

……層雲が無ければここいらで一つ、高等飛行をやって驚かしてくれらるんだがナア……。

……なぞと思ひ続けながら、軽い上げ舵を取って行くうちに、私はフト、私の脚下二三百米突の処に在る層雲の上を、11機の投影が高くなり、低くなりつつ相並んで^{すべ}行

くのを発見した。

それを見ると流石さすがに飛行慣れた私も、何ともいえない嬉しさを感じない訳に行かなかった。大空のただ中で、空の征服者のみを感じ得る、澄み切った満足をシミジミ味わずにはいられなかった。……真に子供らしい……胸のドキドキする……。

……二千五百の高度……。

……静かなプロペラのうなり……。

……好調なスパークの霊感……。

私の眼に、何もかも忘れた熱い涙がニジミ出した。太陽と、蒼あおぞら空と、雲の間を、ヒトリポツチで飛んで行く感激の涙が……それを押し鎮しずめるべく私は、眼鏡めがねの中で二三度パチパチと瞬またたきをした。

……その瞬間であつた……。

ちようどプロペラの真正面にピカピカ光っている、大きな鏡のような青空の中から、一台の小さな飛行機があらわれて、ズンズン形を大きくしはじめたのは……。

私は不思議に思った。あまりに突然の事なので眼の誤りかと思ったが、そう思ううちに

向うの黒い影はグングン大きくなつて、ハッキリした単葉の姿をあらわして来た。

私は心構えしながら舵機だきをシツカリと握り締めた。

……二千五百の高度……。

……静かなプロペラのうなり……。

……好調子なスパークの靈感……。

私は驚いた。固唾かたすを呑んで眼を睜みはつた。向うから来るのは私の乗機と一分一厘ぶりん違わぬ陸

上の偵察機である。搭乗者も一人らしい。機のマークや番号はむろん見えないが……。

……二千五百の高度……。

……静かなプロペラ……。

……好調子なスパーク……。

……青空……。

……太陽……。

……層雲の海……。

私はアット声を立てた。

私が大きく左舵かじを取って避けようとする、同時に向うの機も薄暗い左の横腹を見せつつ大きく迂回うかいして私の真正面に向って来た。

私の全身に冷汗ひやあせがニジミ出た。……コンナ馬鹿な事がと思いつつ慌てて機体を右に向けて、向うの機も真似をするかのように右の横腹を眩まぶしく光らせつつ、やはり真正面に向って来る。

……鏡面に映ずる影の通りに……。

私の全神経が強直した。歯の根がカチカチと鳴り出した。

その途端に私の機体が、軽いエア・ポケツに陥つたらしくユラユラと前に傾いた。……と同時に向うの機もユラユラと前に傾いたが、その一刹那せつなに見えた対機むこうのマークは紛れもなく……T11……と読まれたではないか……。

……と思う間もなくその両翼を、こつちと同時に立て直して向うの機は、真正面から一直線に衝突して来たではないか……。

……私はスイッチを切った。

……ベルトを解いた。

……座席から飛び出した。

……パラシュートを開かないまま百メートル突ほど落ちて行つた。

私と同じ姿勢で、パラシュートを開かないまま、弾丸のように落下して行く私そっくりの相手の姿……私そっくりの顔を凝視しながら……。

……はてしもない青空……。

……眩しい太陽……。

……黄色く光る層雲の海……。

街路

大東京の深夜……。

クラブで遊び疲れたあげく、タツタ一人で首垂れて、トボトボと歩きながら自宅の方へ帰りかけた私はフト顔を上げた。そこいら中がパアツト明るくなったので……。

……そのトタン……飛び上るようなサイレンの音に、ハッと驚いて飛び退く間もなく、一台の自動車が疾風はやてのように私を追い抜いた。……続いて起る砂ほこり……ガソリンの臭い……4444の番号と、赤いランプが見る見るうちに小さく小さく……。

……ハテナ……あの自動車の主ぬしは人形じやなかったかしら……あんまり綺麗過ぎる横顔であった。着物はよくわからなかったが、水の滴るような束そく髪はつに結ゆって、真白おしろいに白粉おしろいをつけて、緑色の光りの下にチンと澄まして……黒水晶のような眼をパツチリと開いて、こころ持ち微笑ほほえみを含みながら、運転手と一緒に、一直線の真正面を見詰めて行った。あの反そり身みになった澄まし加減がイカニモ人形らしかった……と思う中うちに又一台あとから自動車が来た。

私はすぐに振り返ってみた。

その自動車の主はパナマ帽かぶを冠かぶった紳士であった。緒あから顔の堂々と肥った、富豪の典型のような……それが両手をチャンと膝ひざに置いて、心持ち反り身みになったまま、運転手と一緒に、一直線の真正面をニコニコと凝視しながら、私の前をスーッと通り過ぎた。自動車の番号は111111……。

……人形だ人形だ。今の紳士はたしかに人形だった……ハテナ……オカシイゾ……。

……と考えているうちに私は又、石のように固くなつたまま向うから来かかつた自動車の内部を凝視した。

……今度は金きんらん欄の法衣を着た坊さんであつた。若い、品のいい宮様のように鼻筋のおつた人形……それが心持ち眼を伏せて、両手を拝み合わせたままスーツと迂つて行つた。

私はブルブルと身震いをした。あたりは森しんかん閑とした街路……大空は星で一パイ……。

……深夜の東京の怪……私がタツタ一人で見た……。

私は、私の周囲に迫りつつある、何とも知れない、気味のわるい、巨大な、恐ろしいものを感じた。一刻も早く家うちに帰るべくスタスタと歩き出した。

その時に私の前と背後うしろから、二台の自動車が音もなく近付いて来た。

……私と……。

……私の夢の……。

……結婚式当日の姿……。

私は逃げ出した。クラブの玄関へ駈け込んで、マットの上にぶツ倒れた。

「助けてくれ」

病院

私はいつの間にか 頑がんじょう丈な鉄の檻おりの中に入れられている。白い金かなきん巾の患者服を着せられて、ガーゼの帯を捲き付けられて、コンクリートの床のまん中に大の字な型に投げ出されている。

……精神病院らしい。

しかし私は驚かなかつた。そのまま声も立てずにジツト考えた。ここが精神病院だとわかれば、騒いでも無駄だからである。騒げば騒ぐほど非道ひどい目に合う事がわかり切っているからである。おまけに今は深夜である。かなり大きい病院らしいのにコツトリとも物音がしない。……騒いではいけない、憤おこつてはいけない。否々いな。泣いても笑つてもいけないのだ。いよいよキチガイと思われるばかりだから……。

私はそろそろとコンクリートの床のまん中に坐り直した。両手を膝の上に並べて静坐をして、眼を半眼に開いて、檻の鉄棒の並んだ根元を凝視した。神経を鎮しずめるつもりで……。果して私の神経はズンズンと鎮静して行つた。かなり広い病院の隅から隅までシンカンとなつて……。

その時であった。私が正面している鉄の檻の向うから誰か一人ポツポツと歩いて来た。それは白い診察着を着た若い男らしく、私が坐っているコンクリートの床よりも一尺ばかり高くなっている板張りの廊下を、何か考えているらしい緩やかな歩度でコトリコトリと近付いて来るのであったが、やがて私の檻の前まで来るとピツタリと立ち止まった。そうして両手をポケットに突込んだまま、ジツト私を見下しているらしく、爪先を揃えたスリッパ兼用の靴が、私の上脛の下に並んだまま動かなくなった。

私はソロソロと顔を上げた。

その私の視界の中には、まず膝の突んがった縞のズボンと、インキの汚染のついた診察着が這入って来た……が……それはどこかで見た事のある縞ズボンと診察着であった……と思つてチョツト眼を閉じて考えたが……間もなく私はハツと気付いた。眼をまん丸く剥き出して、その顔を見上げた。

それは私が予想した通りの顔であった。……青白く痩せこけて……髪の毛をクシヤクシヤに掻き乱して……無精髪を蓬々と生やして……憂鬱な黒い瞳を伏せた……受難のキリストじみた……。

それは私であった……嘗てこの病院の医務局で勉強していた私に相違なかった。

私の胸が一しきりドキドキと躍り出した。そうして又ドクドク……コツコツコツと静まって行つた。

診察着の背後うしろの巨大な建物の上を流れ漂う銀河が、思い出したようにキラキラと輝いた。……と……同時に私は、一切の疑問が解決したように思った。私を精神病患者にして、この檻に入れたのは、たしかにこの鉄格子の外に立っている診察着の私であつた。この診察着の私は、あまりに自分の脳髓を研究し過ぎた結果、精神に異状を呈して、自分と間違えてこの私を、ここにブチ込んだものに相違なかつた。この「診察着の私」さえ居なければ私は、こんなにキチガイ扱いされずとも済む私であつたのだ。

そう気が付くと同時に私は思わずカツとなつた。吾を忘れて、鉄檻の外の私の顔を睨み付けながら怒鳴つた。

「……何しに来たんだ……貴様は……」

その声は病院中に大きな反響を作つてグルグルまわりながら消え失せて行つた。しかし外の私は少しも表情を動かさなかつた。診察着のポケットに両手を突込んだまま、依然としてキリスト基督じみた憂鬱な眼付で見下しつつ、静かな、澄ちやうめい明な声で答えた。

「お前を見舞いに来たんだ」

私はイヨイヨカツとなった。

「……見舞いに来る必要はない。コノ馬鹿野郎……早く帰れ。そうして自分の仕事を勉強しろ……」

そういう私の荒っぽい声の反響を聞いているうちに私は、自分の眼がしらがズワーと熱くなって来るように思った……何故だかわからないまま……しかし外の私はイヨイヨ冷静になったらしく、その薄い唇の隅に微な冷笑を浮かべたのであった。

「お前をこうやって監視するのが、俺の勉強なのだ。お前が完全に発狂すると同時に俺の研究も完成するのだ。……もうジキだと思っただけ……」

「おのれ……コノ人非人。キ……貴様はコノ俺を……オ……オモチヤにして殺すのか……コ、コ、コノ冷血漢……」

「科学はいつも冷血だ……ハハ……」

相手は白い歯を出して笑った。突然に空を仰いで……嘯くように……。

私は夢中になった。イキナリ立ち上って檻の中から両手を突き出した。相手の白い診察着の襟を掴んでコヅキ廻した。

「……サ……ここから出せ……出してくれ……この檻の中から……そうして一緒に研究を

完成しようじゃないか……ね……ね……後ご生しょうだから……」

私は思わず熱い涙に咽むせんだ。その塩辛い幾流れかを咽のど喉の奥へ流し込んだ。

けれども診察着の私は抵抗もしなければ、逃げもしなかった。そうして患者服の私に小突かれながら苦しそうに云った。

「……ダ……メ……ダ……お前は俺の……大切な研究材料だ……ここを出す事は出来ない」

「ナ……ナ……何だと……」

「お前を……ここから出しちゃ……実験にならない……」

私は思わず手をゆるめた。その代りに相手の顔を、自分の鼻の先に引き付けて、穴の明く程覗き込んだ。

「……何だと！ モウーペン云って見ろ」

「何遍云ったっておんなじ事だよ。俺はお前をこの檻の中に封じ籠こめて、完全に発狂させなければならぬのだ。その経過報告が俺の学位論文になるんだ。国家社会のために有益な……」

「……エエツ……勝手に……しやがれ……」

と云いも終らぬうちに私は、相手のモシヤモシヤした頭の毛を引っ掴んだ。その眼と鼻

の間へ、一撃を食らわした。そうして鼻血をポタポタと滴らしながらグツタリとなった身体を、力一パイ向うの方へ突き飛ばすと、深夜の廊下に夥しい音を立てて……ドターン……と長くなった。そのまま、死んだように動かなくなった。

「……ハツハツハツ……ザマを見る……アハアハアハ」

七本の海藻

曇り空の下に横たわる陰鬱な、鉛色の海の底へ、静かに静かに私は沈んで行く。金貨を積んで沈んだオース丸の所在をたしかめよ……という官憲の命令を受けて……。

潜水着の中の気圧が次第次第に高まって、耳の底がイイイ——ンと鳴り出した。続いて心臓の動悸がゴトンゴトン、ボコンボコンという雑音を含みながら頭蓋骨の内側へ響きはじめ。それにつれて、あたりの静けさが、いよいよ深まって行くような……。

……どこか遠くで、お寺の鐘が鳴るような……。

灰色の海藻の破片がスルスルと上の方へ昇って行く。つづいて、やはり灰色の小さい魚の群が、整然と行列を立てたまま上の方へ消え失せて行く。

眼の前がだんだん暗くなり初める。

……とうとう鼻をつま抓まれても解らない真の闇になると、そのうちに重たい靴底がフンワリと、海底の泥の上に落付いたようである。

私は信号綱を引いて海面の仲間に知らせた。

私は潜水兜かぶとに取付けた電燈の光りをたよりに、ゆっくりゆっくりと歩き出した。まん丸い、ゆるやかな斜面を持った灰色の砂丘を、いくつもいくつも越えて行つた。

しかし行けども行けども同じような低い、丸い砂の丘ばかりで、見渡しても見渡しても船の影はおろか、貝殻一つ見当らなかつた。……のみならず私は暫く歩いて行くうちに、そこいら中がいつともなく薄明るくなつて、青白い、燐りんのような光りに満ち満ちて来たことに気が付いた。……沙漠の夕暮のような……冥府あのよへ行く途中のような……たよらない……気味のわるい……。

私は静かに方向を転換しかけた。何となく不吉な出来事が、私の行く手に待っているよ
うな予感があったので……。けれども、まだ半廻転もしないうちに、私はハツと全身を強直
さした。

ツイ私の背後の鼻の先に、いつの間に立ち現われたものか、何ともいえない奇妙な恰かっこ

好をした海藻の森が、涯^はてしてもない砂丘の起伏を背景にして迫り近付いている。

……海藻の森……その一本一本は、それぞれ五六尺から一丈ぐら^{しやう}いある。頭のまん丸いホンダワラのような楕円形をした……その根元の縊^くれたところから細い紐^{ひも}で海底に繋がっている。並んだり重なり合ったりしながら、お墓のように垂直に突立っている。蒼白^{あおしろ}い、燐光^{りんこう}の中に、真黒く、ハッキリと……数えてみると合計七本あった。

私は唾然^{あぜん}となった。取りあえずドキンドキンと心臓の鼓動を高めながら、二三步ゆるゆると後^{あと}じさりをした。

するとその巨大な海藻の一群^{ひとむれ}の中でも、私に一番近い一本の中から人間の声が洩れ聞えて来た。

低い、カスレた声であった。

「モシモシ……」

私は全身の骨が一つ一つ氷のように冷え固まるのを感じた。同時に、その声の正体はわからないまま、この上もなく恐ろしい妖怪に出遭ったような感じに囚われたので、そのままおもじりじりと後じさりをして行った。すると又、右手に在る八尺位の海藻の中から、濁った、けだるそうな声が聞えて来た。

「……貴方は……金貨を探しに来られたのでしょうか」

私の胸の動悸が又、突然に高まった。そうして又、急に静かに、ピツタリと動かなくなつた。……妖怪以上の何とも知れない恐ろしいものに睨まれて、睨まれていることを自覚して……。

すると又、一番向うの背の低い、すこし離れている一本の中から、悲しい、優しい女の声がユツクリと聞えて来た。

「私たちは妖怪じゃないのですよ。貴方がお探しになつているオーラス丸の船長夫婦と……一人の女の児と……一人の運転手と……三人の水夫の死骸なのです。……今、貴方とお話したのは船長で、妾はその妻なのです。おわかりになりました……。それから一番最初に貴方をお呼び止めたのは一等運転手なのです」

「……聞いてくんねえ。いいかい……おいらは三人ともオーラス丸の船長の味方だったのだ」

と別の錆び沈んだ声が云つた。

「……だから人非人ばかりのオーラス丸の乗組員の奴等に打ち殺されて、ズツクの袋を引っかぶせられて、チャンやタールで塗り固められて、足に錘を結わえ付けられて、水雑炊にされちまつたんだ」

「……………」

「……それからなあ……ほかの奴らあ、船の破片を波の上にブチ撒まいて、沈没したように見せかけながら、行衛ゆくえを晦くらましちまやがったんだ」

「……………」

「……その中でも発頭ほつとう人にんになっていた野郎がワザと故郷の警察に嘘を吐つきに帰りやがったんだ。タツタ一人助かったような面つらをしやがって……ここで船が沈んだなんて云いふらしやがったんだ……」

「ホントウよ。オジサン……その人がお父さんとお母さんの前で、妾を絞め殺したのよ。オジサンはチャント知っていらつしやるでしょ」

という可愛らしい、悲しい女の児の声が一番最後にきこえて来た。七本のまん中にある一番丈たけの低い袋の中から洩れ出したのであろう……。あとはピツタリと静かになって、スツツという啜すすり泣きの声ばかりが、海の水に沁み渡って来た。

私は棒立ちになつたまま動けなくなった。だんだんと気が遠くなつて来た。信号綱を引く力もなくなつたまま……。

私が、その張本人の水夫長だったのだ……。

……どこかで、お寺の鐘が鳴るような……。

硝子世界

世界の涯はての涯まで硝子ガラスで出来ている。

河や海はむろんの事、町も、家も、橋も、街路樹も、森も、山も水晶のように透きとおっている。

スケート靴を穿はいた私は、そうした風景の中心を一直線に、水平線まで貫いている硝子の舗道をやはり一直線にすべにかなた行こって行く……どこまでも……どこまでも……。

私の背後のはるか彼方かなたに聳そびゆるビルディングの一室が、真赤な血の色に染まっているのが、外からハッキリと透かして見える。何度振り返って見ても依然としてアリアリと見えている。家越し、橋越し、並木ごしに……すべてが硝子で出来ているのだから……。

私はその一室でタツタ今、一人の女を殺したのだ。ところが、そうした私の行動を、はるか向うの警察の塔上から透視していた一人の名探偵が、その室が私の兇行で真赤になつたと見るや否や、すぐに私とおんなじスケート靴を穿いて、警察の玄関から私の方向に向

つて迂り出して来た。スケートの秘術をつくして……弦つるを離れた矢のように一直線に……。それと見るや否や私も一生懸命に逃げ出した。おんなじようにスケートの秘術をつくして……一直線に……。矢のように……。

青い青い空の下……ピカピカ光る無限の硝子の道を、追う探偵も、逃げる私もどちらもお互同志に透かし合いつつ……ミジンも姿を隠すことの出来ない、息苦しい気持のままに……。

探偵はだんだんスピードを増して来た。だから私も死物狂いに爪先を蹴立てた。……一歩を先んじて迂り出した私の加速度が、グングンと二人の間の距離を引離して行くのを感じながら……。

私は、うしろ向きになって迂りつつ右手を上げた。拇指ぼしを鼻の頭に当てがって、はるか
に追いかけて来る探偵を指の先で嘲ちやうろう弄し、侮辱してやった。

探偵の顔色が見る見る真赤になったのが、遠くからハッキリとわかった。多分齒は齧がみをして口惜くやしがつているのであろう。溺れかけた人間のように両手を振りまわして、死物狂いに硝子の舗道を蹴立てて来る身振りがトテモ可笑おかしい……ザマを見やがれ……と思いな
がらも、ウツカリすると追い付かれるぞと思つて、いい加減な処でクルリと方向を転換し

たが……私はハツとした。いつの間にか地平線の端まで来てしまった。……足の下は無限の空虚である。

私は慌てた。一生懸命で踏み止まろうとした。その拍子に足を踏みこらして硝子の舗道の上に身体をタタキ付けたので、そのまま血だらけの両手を突張って、自分の身体を支え止めようとしたが、しかし今までこつて来た惰力が承知しなかった。私の身体はそのまま一直線に地平線の端から、こり出して無限の空間に真逆様に落込んだ。

私は歯噛みをした。虚空を掴んだ。手足を縦横ムジンに振りまわした。しかし私は何物も掴むことが出来なかった。

その時に一直線に切れた地平線の端から、探偵の顔がニユツと覗いた。落ちて行く私の顔を見下しながら、白い歯を一パイに剥き出した。

「わかったか……貴様を硝子の世界から逐い出すのが、俺の目的だったのだぞ」
「……………」

初めて計られた事を知った私は、無念さの余り両手を顔に当てた。大きな声でオイオイ泣き出しながら無限の空間を、どこまでもどこまでも落ちて行った……。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年8月24日 第1刷発行

底本の親本：「瓶詰地獄」日本小説文庫、春陽堂

1933（昭和8）年5月15日発行

初出：「文学時代」

1931（昭和6）年10月

「探偵クラブ」

1932（昭和7）年6月

入力：柴田卓治

校正：しず

2000年6月9日公開

2012年5月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

怪夢

夢野久作

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>